

子どもも大人も
楽しく遊べ



新潟県長岡市

冒険遊び場赤城コマランド



ここ冒険遊び場赤城コマランドでは、日ごろの仕事の疲れからが大の字に寝そべったお父さんをお腹の上に乗った男の子が起こそうとしているし、ベンチではお父さんとその娘さんがまるで恋人同士のように話している。かたやこのシンボルとでも言うべきツリーハウスの最上階には子どもたちがむらがついている。地肌をむき出した崖にはられたロープにつかまり女の子たちが上り下りに興じている。そこを通りかかったおばあちゃんたちが、「私にもできるかしら」と問いかげ、「ここをつかんで、足をこう……」と女の子たちが教えている。この日は、午前中に植樹が行なわれ、午後はそれぞれが思い思いに春の一日を楽しんでいる。

赤城コマランドの母体である四郎丸教育環境づくりの会が「子どもたちを地域全体で育てる」ことをめざして、学校の教師やPTAをメンバーとして発足したのは、平成十年のこと。同会が最初に手がけたのが、子どもたちに自由な遊びを体験してもらうと四郎丸小学校の敷地にピオトープを作ること。しかし、残念ながらこの計画は、「死角をなくし見通しをよく」という一部の保護者の声に押されて頓挫してしまう。この動きを見かねた、前PTA会長で農業を営む駒村清吾さんが「自分の山を貸そう」と六千坪の里山の無償提供を申し出る。

早速、子どもも参加して、この里山の探検隊が組織された。熊笹やスキをかきわけすむ中で、湧き水の出る沢、狸の棲家などを発見す



る。そして、炭焼き小屋を、池を、秘密基地を、などのアイデアがつきつきに出されたという。しかし、当惑もしたという。「どこから手をつけたら良いのか?」と。

半年ほど経過したのち、二人の翁が登場する。この里山が荒れているとして、マタギの伊知地翁は、頂上のほうから、藪を刈り取り、そこにブナの苗木を植え始める。もう一人、駒村さんのお父さんは、下のほうからヒノキの苗木を植え始める。苗木が成木になるには少なくとも百年。それを聞いてメンバーは圧倒されたという。が、二人の翁につられ、植樹を手伝い始める。この作業をしているなかで、荒れた里山を再生するための植樹と冒険遊び場の構想が出来上がってきたという。「植林は、その結果を知ることのない作業、木々の成長に合わせて、ゆっくり、ゆっくりと楽しんでいこう」と。今の子どもたちだけでなく、もっと未来の子どもたちのためになすべきことをしようと。

そして、この地の氏神様が祀ってある赤城神社と提供者の駒村さんの名を取って、「赤城コマランド」と名づけられた。人々は、春と秋の年二回の植樹際とあわせ、仕事の合い間を縫って、思い思いに赤城コマランドにやってきて整備を進めていく。間伐や下草を刈り、「あかみち」をつなぎ合わせてトレッキングコースを、バリアフリーロードづくりを、ひょうたん池の掘削を、炭焼き小屋の復活を、さらに周辺地域の廃棄物の撤去作業などなど。



連絡先

〒940-0046 新潟県

長岡市四郎丸1-11-20

四郎丸コミュニティーセンター

TEL 0258-38-0132

これでマタギ衆の一員。そして、「この土地の固定資産税を払う権利を持つ」―親父役や「面倒なことを先頭で行う権利をもつ」―世話役など四役がいる。四役の任期は十年。すぐに結論のでない悠久の活動を続けていこうとする赤城コマランドの活動にふさわしい規約といえる。

総合的な学習の場としても利用されている。最初、遊び道具もなく、林が広がるこの里山に戸惑いを見せた子どもたち、次第に自分たちで遊びを考え出していく。ツリーハウスは子どもたちの創案で作られた。

赤城コマランドは今も広がりつつある。昨年には、周辺の地主さんに無償提供を呼びかけたところ、こころよく引き受けてくれたし、今年に入って長岡市の市有地も提供してくれ、現在では十ヘクタールの敷地を有するまでになっている。世話役の山川成雄さんは、「最初、トラストでも組もうかと考えたこともあるが、無償提供してもらえば安上がりだし」と笑う。

「木の生長にあわせ、ゆっくりとゆっくりとやっていこう」という赤城コマランドの面々の思いは、規約にも表れている。ここで一度でも遊んだことのある人、訪れたことのある人を「コマランダー」と、メンバーを「マタギ衆」と呼び慣わしている。マタギ衆になるには、資格は要らない。自分がマタギ衆だと思えば、それでマタギ衆の一員。そして、「この土地の固定資産税を払う権利を持つ」―親父役や「面倒なことを先頭で行う権利をもつ」―世話役など四役がいる。四役の任期は十年。すぐに結論のでない悠久の活動を続けていこうとする赤城コマランドの活動にふさわしい規約といえる。